

2年間の研究個別指導から得た生涯の宝

福井大学医学部附属病院

木下尚紀

私は英語論文を作成したいと思っていたものの、英語が苦手なため、英語論文の作成から逃避していました。そのような時、日本放射線技術学会(JSRT)の研究個別指導プログラムにより、土井邦雄先生から約2年間にわたるご指導を受ける機会を頂きました。そのおかげで、作成した論文¹⁾が Journal of Applied Clinical Medical Physics にアクセプトされました。

この2年間は色々なことを経験しました。英語論文の作成は想像以上に大変であり、作成した論文を海外の雑誌に投稿しましたが、二つの雑誌でリジェクトされました。英語論文の作成経験のない方が、論文がアクセプトされるまでの一連の過程を、すべて自力で取り組むことは容易なことではありません。しかしJSRTには研究個別指導プログラムがあります。本稿では、当時私が受けた内容についてまとめました。これから英語論文を書きたいと思う方に、少しでもその内容について伝われば幸いです。

土井先生と初めてお会いしたとき、まず私が取り組む研究内容を説明しました。その後、和文による論文作成の重要性、論文の組み立て方、そして各セクションの構成について教えて頂きました。約2時間程度のご指導でしたが、濃密な時間でした。

お会いした日以降、約10カ月もの間メールで論文作成のご指導を受けました。まず各セクションの和文原稿を完成させ、不明確な箇所についてご指摘して頂き、再び原稿を推敲する流れでした。和文原稿が完成した後、英文原稿を作成しました。土井先生からご指摘された箇所を読み直すと、自身の考えがまとまっていない文章だということに気付きました。

和文原稿は「自分のための原稿として作成すること、すなわち自分の言葉で自分が理解できるように書くようにしてください。話し言葉がよいと思います」とご指導を受けました。英語論文といえども和文を作成する能力は重要であり、その後の英文原稿の出来に大きく関わってくると感じました。

考察を作成していたとき、自身の考えが明確でな

かったため、毎日ご指導を受けました。約1~2カ月悩みましたが、土井先生から「考察は研究者の思想を述べる部分です。書き始める前に、何を言いたいのかを、簡潔に列記するのがよいと思います」とご指導を受けました。このお言葉で自身の考えが整理でき、考察も作成できました。和文の重要性は特に考察で認識しました。

英文原稿の作成では、自身の知っている単語や表現方法が少ないことに気付かされました。「英語論文の作成に近道はなく、論文を多数読み英語に慣れること。まずは一編の論文を一週間で読むこと。慣れれば一日で一編の論文を読むことを目標にし、更に一日で何編も読む努力をする。そうすればいろいろな英語の表現方法も理解できる」と教えて頂きました。英文作成の上達には、日々の地道な努力の積み重ねがとても大事であると感じました。

作成した原稿を雑誌に投稿した後、その査読結果が返ってきました。「査読者への返事をまず日本語で、すべての項目に対して簡潔に用意してください。その後、英文に書き換えるのです。これができてから、次に本文の修正を行います」とご指導を受けました。原稿を作成するときと同様に、修正原稿と査読者への返事の作成は、まず伝えたいことを和文でしっかりまとめることが大事であると感じました。

査読結果を頂いてから約5カ月で原稿を2回修正して、論文がついにアクセプトされました。そのとき、土井先生はこれまでに感じたことのない感動と自信を私に与えてくれました。常に私自身に考えさせる土井先生のご指導が、論文のアクセプトまで導いてくれました。この2年間の経験は、私にとって生涯の宝です。

本研究個別指導プログラムを受けた後、私は2編の英語論文を作成し、投稿しています。本プログラムは大学院生の論文指導と同じだと土井先生から伺いました。本プログラムに応募して、多くの会員が英語論文を投稿し、患者さんの医療に貢献できればとても素晴らしいことだと思います。

参考文献

1) Kinoshita N, Oguchi H, Nishimoto Y, et al. Comparison of AAPM addendum to TG-51, IAEA TRS-398, and JSMP 12:

calibration of photon beams in water. J Appl Clin Med Phys 2017; 18(5): 271-278.